

## アダム・スミスの動態理論

—ヒュームとカントを介して—

星野彰男（関東学院大学・名）

### 1. はじめに一労働生産力とは？

経済活動は労働（生産）と消費の循環によって成り立つ。その労働は一定でなく、分業→機械化によって著しく向上・高度化する。したがって、経済学はそれを動因とする動態理論であるはずだ。しかし実際には、労働能力一定と仮定する静態理論の上に動態論を加える二分論[ミル→シュンペーター]を定説化してきた。この二分論を克服するために、動態理論としての「アダム・スミス生産力体系」[高島]や「内生的成長論」等[ハイエク他]が提起されてきた。スミスの動的な「高賃金の経済」論も強調された[小林]。しかし、それらの理論的裏付けが十分でなかったため、この裏付けとなるスミス動態理論を、ヒュームとカントを介して検証したい。

スミス経済学とカント哲学の関係は不問に付されてきた[浜田]。その主な理由はスミス理論破綻説が定説化していたためだろう。だが、それが破綻していない[Meacci\*、星野]とすれば、両者の関係も見直されるべきだ。カント『純粹理性批判』は、その中心主題である「カテゴリー」（量・質・関係・様相）によるヒューム経験論（懐疑論）の克服を一大目的としている。スミスも『国富論』冒頭の「商業社会」論で、ヒュームの経験的な商業社会論の克服を主題としている。ここに、ヒュームを介して両著の重なる可能性が窺える。

『国富論』[序論]は、第1編で労働生産力の「増進」、第2編で生産的労働量の割合増を論ずると言う。そうすると、労働論において第2編の量論と区別される第1編は質論だと言えよう。そして、第2編の量的割合増より第1編の質的増進の方がはるかに富裕化を促進すると言う。そこで、第1編の「労働生産力」論に絞ってみよう。従来の通説も生産力による富（使用価値）を質とし、交換価値を量と解する。だが、この理解は「労働生産力」の意味を一面化して、交換価値との関係を切断している。この問題点を『国富論』の一文によって示してみよう。

「年々の生産物の価値を増す[increase]には、……生産的労働者の数か、……労働者の生産力を増す以外の方法はない。」[WN, II. iii] この「生産力増」⇒「価値増」視点に対して、リカード[1817]は富と価値を混同していると批判する。そして生産力増⇒富増加、労働者増⇒価値増という枠組みに限定し、これが先の通説の発端となる。しかしスミスは「生産力増」が富・価値双方を増すと論ずる。ただし、それは価値増より富増加の度合いが高い（個別生産物価値が低下する）方向に自ずと収斂する [I. viii 末尾]。また、この一文は序論と同

様に土地による価値形成を退けているから、その当否はスミス理論全体の理解にも関わってくる。そこで、このリカードの批判に対する新たな反証を挙げて、「生産力増」⇒「価値増」視点とそれに基づく動態理論が成立しうることを提起したい。

## 2. 動態理論認識におけるヒュームとスミス

経済学は生産＝消費をめぐる無数の経済現象を総括し組み合わせることによって、経済社会像を形成する試みとして発生した。その代表例がヒューム『政治論集』にある。同書は、商業・貨幣・利子・貿易・財政等を論ずる中で、「世界のあらゆるものは労働によって購買される。」という基本命題により、富は貨幣でなく、労働とその洗練された「勤労[industry]」の成果だと言う。「国民の増加」と区別される「勤労の増進[increase]」が、生産物商品とその「代表物」たる金銀貨幣を「増加」させ、国民的富裕化を実現する。この論理をヒュームは文明史の中から直観的に掴み採った。

すなわち、農業一辺倒の社会から商業が仲介する農・工分業社会への転換によって、各生産者の余剰生産物が相互に交換・売買され、各分業の熟練・技術も向上する。こうして、諸商品の流通に必要な貨幣量の増加[坂本]に表される「勤労の増進」が実現する。農業社会止まりでは、それらの増加は期しえないと言う。この萌芽的な動態理論は、J.スチュアート[1767]の同じく歴史的経験に依拠する貨幣経済視点によって、受容されつつも覆された感がある。その上で、スミスはヒューム動態論を骨格として受け止め、経験的なこの論争を理論認識に昇華させ、論争に決着をつけようとする。

スミスは『国富論』の利子論[Ⅱ.iv]と経済史論[Ⅲ.iv]で、再度、ヒューム商業社会論を絶賛したように、その「勤労の増進」視点を受け入れ、その不十分な点を補っていく。すなわち、第一に、ヒュームの社会的（職業的）分業を資本制企業の工場内分業にも適用して、「勤労の増進」を「労働生産諸力の改良（増進）」と表現する。第二に、「勤労の増進」を労働による「価値」形成として捉え、それを測る「不変の価値尺度」として標準労働時間を適用する[以上, I.i～vi]。第三に、資本蓄積の下での付加価値生産による富・収入増加論を展開する[I.vi～IV]。

その商業社会論では、ヒュームと同様に資本蓄積と土地占有を省き、文明状態での労働一元化社会を想定する。その商品交換関係では、A商品への投入労働量と等しい量の労働が投入されたB商品をAが購買＝支配することによって、両商品の等価交換が成り立つ[I.v,vi]。ヒュームもこの論理を経験的に捉えていたが、「力[power]」という実証できない言葉の使用を強く否定していた[『人間知性研究』7章2部]ため、同様に「価値」という言葉も使わなかった。だが、スミスはこの両語を最重要語として用いる。

すなわち、「労働生産諸力」によって形成された商品による他商品への「支配力の度合 [grade]」 [WN, I. v, 第 2 版, 1778 年] を、「交換価値」と名づける。この価値の測定は、「通常の」標準労働を基準単位として、各労働の強度・複雑度等の度合を係数化することにより成立する。このように、商品の「力の度合」の量的表示手段が「価値」⇒貨幣とされ、重商主義の「富＝貨幣」説をも包含する理論化をなし遂げる。また、ヒュームの余剰生産物交換論はスミスの商業論や貿易論に継承される。

これらの議論の中で、富の「性質と原因」、労働の「分割」・「結合」、諸対象の「諸力の結合」、生産「諸力」、交換・購買・支配する「力」の「度合」、労働「時間」、商品価値⇒貨幣の因果関係、労働生産諸力の「増進」・「連続性」のように、カント「カテゴリー」のとくに「関係」項目に関わる言葉が先行して駆使される。そうすると、商品の「支配力」を表示する「価値」⇒貨幣もそれらの一環を成すことになろう [柄谷]。これらの用法に、カントの認識論と一脈相通ずる視点が窺える。

### 3. 「質」認識におけるスミスとカント

『国富論』 [1776 年 3 月刊, 同年～翌年に独訳] の 5 年後に『純粹理性批判』が刊行される。その間のカント「覚書」 [1776-78] で、当時の神学的認識論からの「コペルニクスの転回」 [Kritik, B [2 版] XVI] が実質的に果たされる [山根, 116-18 頁]。また、カントはヒュームによって「独断のまどろみ」から目覚めさせられた [Prolegomena, 序言] と告白したように、ヒュームの「懐疑的方法」を「批判」として受け継ぐ。その上で、ヒュームが実在性を疑った「原因」・「力」等を、カントは「ア・プリオリな」(根源的に獲得された)「カテゴリー」と見なし、経験認識における「客観的妥当性」が認められる限り、それらの言葉の使用を正当化する。そこに、経験を踏まえたスミスの理論認識とカントの認識方法論の重なりを看取できる。『純粹理性批判』前半の悟性論は、「因果関係」等の諸「カテゴリー」を認識手段 (概念装置) として、諸「現象」(認識対象) にその都度適用して得られる客観的な経験認識の可能性を説く。

そこで、この「カテゴリー」の「質」論とスミス理論の関係を照合してみよう。スミスによれば、市場経済の生産物商品には使用価値と交換価値の二要因がある。従来通説は、先のリカード説を踏襲して生産力を物的富 (使用価値) 生産に限定し、生産力と価値生産の関係を原理的に切断してきた。しかしスミスは商品交換論の中で、「つらい」労働の 1 時間が「楽な」労働 2 時間に相当する場合の他に、10 年の習得期間を要する労働の 1 時間が「ありきたりの」労働 1 ヶ月に相当する例も挙げる。そうすると、分業 (=労働生産力) による「熟練・技量・判断力」や「才能 [talent]」の向上は、その製品の使用価値だけでな

く交換価値をも増進させるはずだ。つまり、それら生産能力の向上により、その製品の他製品への「支配力」＝「交換価値」が高められる。カントの「質」論はこの理論に照応する認識方法を提起している。

『純粋理性批判』は、特定の空間・時間の中での諸「現象」に「カテゴリー」を適用させる方法として、「原則の体系」を提示する。その数学的原則が「量・質」だが、「量」とは「外延量」のことで、「質」とは「内包量、つまり度[Grad]」のことだと対比する。その「質」論としての「知覚の先取的認識」論では、「質」を实在性から否定性に至る無数の「度」を表すもの、つまり実在的事物における密度の問題として、次のように提起する。

「それぞれの实在性はそれぞれに度を持ち、この度は現象の外延量が不変であるにもかかわらず、無限の段階を経て無に至るまで減少していく……。」 [Kritik, B214]

「われわれが量一般に関してア・プリアリに認識できるのは、その唯一の質すなわち連続性[Kontinuitaet]だけだが、あらゆる質（現象の实在的なもの）に関してはその内包量、つまりそれらが度を持つことである……。」 [B217-18]

カントはその実例として重力・熱・各色（濃淡）等を挙げる。これらの現象が「連続性」（質一定）の場合のみ「量」を「認識できる」が、「あらゆる質」の場合は「度」を有すると言う。この認識方法をスミス理解に適用してみよう。先の例では、複雑労働 A が 1 時間である完成品を製造すると、その製品は標準労働 B の 1 ヶ月分の製品を購入・支配できる。これを同一時間の各製造商品で比べれば、A 商品は B 商品に対して約 200 倍の「支配力の度合」＝「交換価値」を有する。重力や各色の「度」がそれらの密度の一環であるように、商品の「支配力」も労働の複雑度等（密度）に起因する。そして市場の交換取引者たちの相互評価によって、この「度合」が標準労働時間（質[＝度]一定）の「外延量」に換算される（＝交換価値）。これがスミスの労働生産力増進の帰結である。このように、カントの質＝実在的「度」の現象認識の方法はスミス理論に照応する。さらに、カントは言う。

「現象の实在的なものを、度から見ると等しくて、集合と外延量の点からだけ異なると思見なすのは誤りである……。」 [B216]

「意識でさえ、依然として減じられうる度を有しており、したがって自己を意識する能力もまたそうであり、こうして他のあらゆる能力もそうである……。」 [B414-15]

これらは魂の持続性を唱える主流派への反駁だが、ヘーゲルはその密度論を『論理学』[1816]から力学に移してしまう。マルクスもこれと同様の視点から、件のリカード説を踏襲する。しかしスミスはカントの言う「誤り」を免れていた。このように、スミスの「労働生産力」論が「価値増加」理論としての客観的妥当性を有することは明らかだろう。

#### 4. スミスの動態理論

前述のリカードやヘーゲルの枠組みが J.S.ミル等によっても踏襲されたため、以後、労働力価値一定＝静態理論の枠組みが学派を問わず通説化してしまった。しかし『国富論』[序論]は第2編だけを「熟練・技量・判断力」の「連続性[continuance]」に限定し、その他の諸編をそれらが「改良・増進」し、「進歩[advance]」した場合としている。つまり、「熟練・技量・判断力」(労働能力)を基準にして、その「改良・増進」[I]、「連続性」[II]、「進歩・増進」[III・IV]を各編区分の根拠にしている。

「連続性」は「量一般の唯一の質」[前掲]だから、第2編は労働生産力の「連続性」(価値一定)の下での雇用「量」を、第1編は労働生産力の「改良・増進」による富・価値双方の増加を、第3・4編は労働生産力が「進歩した」諸国民の政策如何による「勤労の増進」を、各主題とする。とくに第4編は、労働生産力のより高い業種への「勤労」シフトに伴う「富と収入の増加」を最大主題とする。生産的労働量の増加も強調するが、それはより生産的な労働への不断のシフトを伴うから、労働の質的増進を自ずと含む。

これらから、先のリカードのスミス批判は妥当せず、「労働生産力」論による「価値増加」理論は成立すると判断できる。したがって、『国富論』は何よりも、ヒュームの「勤労の増進」を論証した「労働生産力」理論に基づく動態理論の書である。なお、その理論は市場参加者相互の労働評価によって支えられるから、『道徳感情論』[1759]の「同感」原理による行為の「適正」・「メリット」評価論にも由来している[星野,1994]。

ここに、当時の「单子(モナド)論」→「予定調和論」と一脈相通ずるスミスの原子論的経済人なる通説が適切でないことも明白になる。これによって一面化された賃金論、再生産・市場構造論、貿易論等の再検討も避けられない。また、動態的過程の一契機を固定的に理論化すれば、それは過度的条件を一般化する弊を伴う(静態理論)。その挙げ句、人的資本や内生的成長論の導入を余儀なくされた。それらの観点は、本来、スミスの「労働生産力」に含まれるもので、理論体系の冒頭に置かれるべき基礎理論であるはずだ。これを踏まえない資本蓄積論や政策論は量的拡大論にすぎず、動態理論とは言えまい。その意味で、ヒューム→スミス動態理論を発端として位置づけ、リカード以降の静態・動態論、マルクス体系、ハイエク市場論等がその発端のうちに包摂されつつ、それを補充するという動態理論体系が考えられる。こうして、経済学史の展開がその母体となりうるが、そのためにはスミス理論を本来の動態理論として整序し直すことが先決である。

前述の論点をスミス側から見ると、従来通説より、ヒュームとカントという前方・後方からの強力な援護を新たに得て、スミス価値論の比重と信憑性が増すことをも含意する。とくにこのヒューム新解釈からは、労働価値論の実証不可能説に対して、最も徹底した経

験論者ヒュームによる強力な実証例を期待できよう。また、このカント援用によって、スミス純粹理論の客観的妥当性が保証されよう。ただし、それは「労働生産力」理論に関する限りであって、道徳哲学の比較等はまた別のことである。このヒューム→スミス視点による生産的労働と不生産的労働の区別、貨幣（資本）や土地による価値形成の否認（重商主義、重農主義批判）、J・ローの企画（バブル）の克服等の内容は、カントによる「コペルニクスの転回」の経済版に相当しよう。

\*（氏の論文は「労働」概念の明確化と個別・全体の区別によりスミス価値論貫徹説[Peachに次ぐ]を唱える。だが、スミス動態理論[生産力増⇒価値増]には論及していない。）

[主要参考文献]

Hume, David : An Enquiry concerning Human Understanding,1748.

（斉藤繁雄・一ノ瀬正樹訳『人間知性研究』法政大学出版局）

: Political Discourses,1752.（田中秀夫訳『政治論集』京都大学学術出版会）

Smith, Adam : An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations,1776.

（水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』1～4, 岩波文庫）

Kant,Immanuel : Kritik der reinen Vernunft,1781.（宇都宮監訳『純粹理性批判』以文社）

: Prolegomena,1783.（有福孝岳訳『プロレゴメナ』[『全集』6]岩波書店）

高島善哉『経済社会学の根本問題』日本評論社, 1941年.「経済静学と経済動学の国民経済学的意義」[卒業論文 1927年]『著作集』第1巻, こぶし書房, 1998年

Hayek,Friedrich A.von : Individualism and Economic Order,1949.

（嘉治元郎・佐代訳『個人主義と経済秩序』春秋社）

小林昇「アダム・スミスにおける賃金」(『経済学史著作集』Ⅱ, 未来社) 初出 1957年

浜田義文「カントとスミス」『季刊社会思想』3-1, 社会思想社, 1973年

星野彰男『市場社会の体系—ヒュームとスミス』新評論, 1994年.『アダム・スミスの経済思想』2002年.『アダム・スミスの経済理論』2010年, 共に関東学院大学出版会.

「アダム・スミスの市場経済理論」『経済系』249集, 2011年10月

柄谷行人『トランスクリティーク—カントとマルクス—』岩波書店, 2004[初出 2001]年

山根雄一郎『〈根源的獲得〉の哲学—カント批判哲学への新視覚』東京大学出版会,2005年

坂本達哉『ヒューム—希望の懐疑主義』慶應義塾大学出版会, 2011年

Meacci,Ferdinando : On Adam Smith's Ambiguities on Value and Wealth,

History of Political Economy,44(4), 2012